

山県郡遺族連合会

山県郡遺族連合会概要

山県郡遺族連合会創設当時の状況

戦後、昭和二十二年頃、郡内二十ヶ町村において、戦争犠牲者家族を中心として、遺族連合会が結成されたようである。当時山県郡地方事務所が加計町にあり当時加計町初代会長であった中野徳夫氏が創設の中心であった。

昭和三十一年三月二十四日、山県郡戦没者追弔法要が千代田町立千代田中学校体育館で営まれているので、郡連合会の組織も完結し、組織的活動が定着して来たようである。当時町村合併が実施されていた状況の中で資料が散逸して正確が期せられないが、現存の資料によると、山県郡遺族連合会の主要行事は次の通りである。

(1) 昭和三十一年三月二十四日

山県郡戦病没者合同追弔法要

千代田町 千代田町立千代田中学校体育館

(2) 昭和四十五年八月九日

山県郡民平和集会

加計町 県立加計高等学校体育館

(3) 昭和四十五年十二月八日

軍神、上田兵曹長慰霊碑除幕式

千代田町 上田兵曹長生家前

(4) 昭和六十年十一月十四日

終戦四十周年 山県郡戦病没者追悼式

千代田町 開発センター

(5) 昭和四十七年以後毎年郡内町村役員の研修会を実施している。会場は交通機関の関保で、主として広島市内（県遺族会館、広島護国神社）で開催している。

(6) 昭和五十八年以来毎年、郡役員で全国護国神社参拝を実施している。現在まで中国、四国、九州、沖縄、近畿、関東地区十三社参拝した。

(7) 郡内各町村において、青壮年部を中心として靖国神社、中国又は満州地区へ慰霊旅行を実施し、会員の団結と意識の高揚を計っている。

山県郡遺族連合会役員名簿

会長

中野 徳夫

片桐 正比

河野勇之進

伊藤 正己

(昭 22 ～ 46)

(昭 47 ～ 55)

(昭 56 ～ 57)

(昭 58 ～ 平 6)

婦人部長

池田千代子

川野ミサト

花本 文枝

(昭 44 ～ 49)

(昭 50 ～ 51)

(昭 52 ～ 53)

松永 章子

和田カナメ

木本ミツ子

(昭 54 ～ 55)

(昭 56 ～ 57)

(昭 58 ～ 61)

庄野 信子

川野ミサト

伊藤 孝子

(昭 62 ～ 63)

(平 1 ～ 2)

(平 3 ～ 4)

渡 シナヨ

(平 5 ～ 6)

青壮年部長

金元 猛夫

(昭 44 ～ 48)

岡田千代登

(昭 52 ～ 53)

事務局長

湯浅 博文

(昭 35 ～ 36)

香川 茂

(昭 42 ～ 43)

郡会費調査(円)

年 度 昭和39年度

会 費 一〇〇円

年 度 昭和54年度

会 費 一〇〇円

町村役員名簿

(1) 町村会長

加計町

中野 徳夫

(昭 22 ～ 46)

東 勇

(昭 54 ～ 55)

栗栖 時和

(昭 56 ～ 57)

河野 稲男

(昭 58 ～ 63)

栗栖 花子

(昭 49 ～)

岩崎 正司

(昭 54 ～ 平 3)

原 好彦

(平 4 ～ 6)

佐々木悦子

(昭 37 ～ 38)

岡田 幸測

(昭 44 ～ 49)

昭和48年度

昭和55年度

昭和63年度

昭和49年度

昭和50年度

昭和44年度

昭和45年度

昭和46年度

昭和47年度

栗栖 勝美

(昭 50 ～ 51)

国吉多津子

(昭 60 ～)

栗田 勇

(昭 39 ～ 41)

栗田 勇

(昭 39 ～ 41)

栗田 勇

(昭 39 ～ 41)

栗田 勇

(昭 39 ～ 41)

栗田 勇

(昭 39 ～ 41)

栗田 勇

栗田 勇

栗田 勇

栗田 勇

栗田 勇

栗栖富士男

(平 1 ～ 6)

筒賀村

万束 与八

(昭 22 ～ 26)

戸河内町

河本 憲二

(昭 23 ～ 25)

日田 繁雄

(平 4 ～ 6)

芸北町

片桐 正比

(昭 36 ～ 55)

大朝町

佐々木辰男

(昭 34 ～ 38)

千代田町

鉄升 龍市

(昭 30 ～ 38)

岩崎 正司

(平 4 ～ 6)

豊平町

藤田 克己

(昭 33 ～ 37)

佐々木億市

(昭 27 ～ 35)

河野勇之進

(昭 26 ～ 58)

道管十三紀

(昭 59 ～ 平 1)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

石橋 正登

(昭 56 ～ 58)

石橋 弘之

(昭 59 ～ 62)

中束 悠介

(昭 63 ～ 平 6)

牧原 義夫

(昭 39 ～ 61)

安武 隆造

(昭 62 ～ 平 6)

未定 少佐

(昭 50 ～ 51)

伊藤 正己

(昭 36 ～ 平 6)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

栗栖 恒人

(平 2 ～ 3)

(2) 町村婦人部長

加計町

松永 章子

伊藤 孝子

(昭 54 ~ 59)

(昭 60 ~ 平 6)

筒賀村

川野ミサト

(昭 36 ~ 平 6)

戸河内町

道管タマ子

(昭 36 ~ 58)

(昭 59 ~)

芸北町

池田千代子

(昭 47 ~ 平 6)

大朝町

横山 スエ

(昭 41 ~ 49)

(昭 50 ~ 平 6)

千代田町

中野キヌエ

(昭 30 ~ 37)

(昭 38 ~ 59)

渡 シナヨ

(昭 60 ~ 平 6)

豊平町

栗栖美代子

(昭 51 ~ 56)

木本 光子

(昭 57 ~ 平 6)

花本 文枝

(昭 38 ~ 59)

大倉イサヨ

(昭 60 ~ 61)

佐々木妙子

(昭 59 ~)

庄野 信子

(昭 60 ~ 平 6)

(3) 町村青壮年部長

加計町

栗栖 勝美

羽柴 久人

(昭 54 ~ 59)

(昭 60 ~ 63)

筒賀村

尾崎 豊年

佐々木武祈

(昭 36 ~ 38)

(昭 43 ~ 平 6)

戸河内町

新田 早喜

原 好彦

(昭 38 ~ 平 1)

(平 2 ~ 6)

芸北町

沖田 昌彦

小田 一男

(昭 56 ~ 58)

(昭 59 ~ 62)

沖田 昌彦

(昭 63 ~ 平 6)

大朝町

末永 久明

大町 俊子

(昭 50 ~ 57)

(昭 58 ~ 63)

末永 久明

(平 1 ~ 6)

千代田町

山田 政幸

岩崎 正司

(昭 35 ~ 37)

(昭 38 ~ 平 3)

道庭 義明

(平 4 ~ 6)

豊平町

反田 光夫

上原 照幸

(昭 40 ~ 50)

(昭 51 ~ 平 6)

英靈柱数 二七九七柱

加計町	簡賀村	戸河内町	芸北町	大朝町	千代田町	豊平町
六〇六	一七五	三六七	三四七	二七八	四八〇	五四四

(1) 遺族会員数調査

昭
34

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	41	34
九	九	八		八	九	九	九	一〇	一〇	一〇	一〇		
二四	二六	二六	三	三	四〇	四二	四四	四七	五	五	五	七	七
五	五	三	六	五	七		六	八	九	九	一〇		
五		五	五	五	三	七	九	七	五	六	八		
三八	四〇	四〇	四三	四四	四八	五	六	六	六	六	七	七	三八
九	一〇	一〇	一〇	二六	二四	二四	二五	二六	二七	二五	二六		
三三	七五	八〇	八五	九	九八	一〇〇	一〇三	一〇七	一〇〇	一一	一一	一九	

62	六	二	五	四	六	五
61	充	四	六	五	六	七

3	2
四	五
一三	一三
二六	二六
二九	三三
二九	三三
七〇	七五
四一	四四

6

昭40	加計町	簡賀村	戸河内町	芸北町	大朝町	千代田町	豊平町
56	一五、〇〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、三〇〇	〇〇〇、三〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、三〇〇
55	一〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、三〇〇
54	一〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇
53		〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、一〇〇
52		一〇五、〇〇〇	〇〇〇、二〇〇	〇〇〇、二〇〇		〇〇〇、二〇〇	一〇〇〇、一〇〇
51		一〇五、〇〇〇	〇〇〇、一〇〇	〇〇〇、一〇〇		一〇〇〇、一〇〇	一〇〇〇、一〇〇
50		一〇〇〇、一〇〇〇			一〇〇〇、一〇〇	一〇〇〇、一〇〇	一〇〇〇、一〇〇
49		一〇〇〇、一〇〇〇				一〇〇〇、一〇〇	一〇〇〇、一〇〇
46		五〇〇				一〇〇〇、一〇〇	
45		三〇〇			五〇〇		
42		三〇〇			五〇〇		
41		三〇〇			四〇〇		
		三〇〇					

	5	4	3	2	平 1	63	62	61	60	59	58	57
	二、 五、 〇〇	二、 五、 〇〇	二、 五、 〇〇	二、 五、 〇〇	二、 五、 〇〇	二、 五、 〇〇	一、 五、 〇〇	一、 五、 〇〇	一、 五、 〇〇	一、 五、 〇〇	一、 五、 〇〇	一、 五、 〇〇
	五、 〇〇、 〇〇	五、 〇〇、 〇〇	五、 〇〇、 〇〇	五、 〇〇、 〇〇	四、 〇〇、 〇〇	四、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇
	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇				
	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇
	四、 五、 〇〇	四、 五、 〇〇	四、 五、 〇〇	四、 五、 〇〇	四、 五、 〇〇	四、 五、 〇〇	四、 五、 〇〇					四、 〇〇、 〇〇
	五、 〇〇、 〇〇	五、 〇〇、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇	二、 〇〇、 〇〇
	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 五、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇	三、 〇〇、 〇〇

英霊頭彰について

(1) 慰霊祭、追弔法要及び記念行事

町村	行事	追弔法要	慰霊祭	記念行事
豊平町	昭和44年より平成6年まで実施以後中断			昭和52年慰霊碑に石灯籠建立
千代田町	毎年追弔法要と慰霊祭を交互に執行している	上に同じ		
大朝町	昭和42年より隔年実施現在に至る	昭和41年より隔年実施現在に至る		昭和50年終戦30周年記念行事実施
芸北町	昭和32年より平成1年まで隔年以後毎年実施	昭和50年より昭和62年まで隔年実施		昭和60年終戦40周年大追弔法要
戸河内町	昭和32年より毎年実施（上殿地区毎年実施）	昭和30年以降毎年実施今日に至る		
簡賀村	昭和22年より平成5年まで毎年実施以後隔年	昭和30年より毎年実施平成4年より追悼式		終戦30周年記念事業鳥居建立
加計町	昭和54年より61年まで実施	昭和54年より毎年実施		



簡賀村招魂社



簡賀村忠魂碑

招魂社及び忠魂碑



戸河内町護国神社



戸河内町上殿地区墓地



豊平町慰霊碑



戸河内町戦没者上殿墓地

(2) 招魂社、慰霊碑の所在地

豊平町	千代田町	大朝町	芸北町	戸河内町	筒賀村	加計町	区分	
							町村	
	旧八重町内に 護国神社			昭和30年建立	明治29年建立 筒賀公園		合併前	招魂社
				昭和46年現在 地移転 町グランド		長尾神社境内 加計町	合併後	
	南方村本地村 壬生町川迫村 にあり	大朝町大朝新 庄村新庄		町営グランド に建立	明治29年昭和 7年建立 筒 賀公園		合併前	慰霊碑
昭和43年8月 建立 琴谷地区	上に同じ	大朝町大朝	昭和52年町役 場北側に建立	町営グランド		長尾神社境内 加計町	合併後	

父を偲んで

千代田町遺族会長 岩崎 正 司

(一) 召集令状

昭和十九年、春の日射しが眩しい縁側で父は私の散髪をしてくれていた。「岩崎さんおめでとうございます」召集令状だった。父は笑顔で「ありがとうございます」と言ったきり散髪が終る迄一言も話さなかったのを今もはっきりと覚えている。

覚悟はしていたのだろうが、妻と私十才、弟七才、妹三才と一才の子供四人を残して出征する胸中は私も妻子を持つ身に成ってみて始めて痛い程解るのである。村の出征兵士を送る会で軍服姿で挨拶する父は、すばらしく立派に見えた。出征して一週間後、面会が許され広島城麓の西練兵場に家族全員で行った。あちこちの木陰が面会々場、持参した弁当を食べながら許された時間いっぱい別れを惜しんだ。父は翌日輸送船で海を渡り中国に送られた。

(二) 働きに働く母と一緒に

四人の子供を抱え農作業も一手に引受け、留守を守る母は働きに働いた。月日が過つにつれ食糧事情の極めて悪くなる中一番下の妹は一寸した風邪がもとで手当ての甲斐なく死んだ。何故か、それが格別可愛想で自分の責任にも感じられ、それからは母を助け弟妹の面倒や野良仕事も手伝った。親戚や近所から馬や牛を借り、春は田植の用意、秋は麦播きの準備もした。今考えると十才余りの子供がとても考えられるものではない。

(三) 戦場からの便り

戦地から軍事郵便で半年余りの内に十数通母や私宛に届いた。「皆元気か、父は元気で奉公している。正司は一生懸命勉強しているか、母の手伝いもしているか、弟や妹の面倒を見ているか、しっかりと勉強や運動をして立派な兵隊さんになるんだぞ、便りを送ってくれ」どれ程故郷の事が知れたかった事か、母も私も毎回異なる場所から来る便りに返事は送るのだが最後迄一通も届かなかったらしい。父のハガキは靖国神社参拝には必ず胸のポケットに入れて行く。「兵隊さんに成れ」そう書かないと簡閲が通らなかつたのか、それとも当時の軍国主義教育が父の思想を本当にそうさせていたのか解らない。

(四) 父の死と遺骨

二十年二月父の戦友より「岩崎君は靖国神社に帰られた」と取り急ぎの便りが届いた。父の無事な生還を夢みていた母も子もその場にぐずれ泣きに泣いた。その日からの我が家は一転して真暗闇な生活になってしまった。しばらく後、公報が届き桜が満開の己斐駅に遺骨を迎えに行つた。しかし中には小さな位牌のみであつた。

(五) 戦後の生活

原爆が投下され終戦を迎え村も戦後の慌しい生活が始まった。そんな中戦地から復員される方で賑やかに成ってゆく。父は死んだのだと解つていても、もしかして帰つて来てくれるのではと思う毎日であつた。新制中学の卒業が近づくと、高校に進学したい、貧乏所帯をやりくりする母に言い出せなかつた。地元で就職し一年後当時比治山の下にあつた県庁のドアをたたき国泰寺高校通信教育部に入学させてもらった。

(六) 遺族会活動に参加

戦後も二十五年過つた昭和四十五年、日本遺族会青年部広島支部三三一号の部員証をもらい組織の一員として仲間に入れてもらった。同じ境遇に生きる者同志の集りであり一層親しみが強く感じられる。町遺族会の活動にも進んで参加した。その事が父へのせめて親孝行だと考え是迄続けている。一昨年私の町の遺族会で中国に慰霊参拝に訪れた。父達が戦つたであろう山野、川、コリーヤン畑を飛行機や列車、バスの窓から眺め、夜人影のない所で持つて行つた線香と酒を供え臉に浮かぶ父に祈つた。

(七) 父の戦死を犬死にさせない

我が家では昨年暮れ父の五十回忌法要をした。父出征の後、親戚や近所の方々にお世話に成つたお礼、母に幼かつた私達子供を一人前に育ててくれたお礼を言わせてもらい何か一区切りついた様でほつとしてゐる。これからは国のため身命を捧げた人々を犬死にさせない為、英霊顕彰と何が何でも靖国神社国家護持実現のため遺族会活動に微力を捧げた。又我が家父の墓の隣りに、父参戦の状況、留守家族の状況、平和とはいかに大切なものであるか、戦争はどんな事があつても世界からなくさなくてはならない、と石碑に刻み孫子の末迄伝えたいと考えている。

(山県郡千代田町本地)

思 い 出

山県郡遺族連合会婦人部長

渡

シナヨ

夫が山口県光海軍工廠へ勤めていましたので、私達は光市営住宅に住

んでいました。戦局は悪くなるばかりの、昭和二十年三月三日に召集令状が来しました。三月十二日広島西部第二部隊に入隊とのことでした。当時私達の家族は体の不自由な祖父、九才の長女、六才の次女との五人家族でございました。三月十日光市より出征祝のお酒一升と、お米一升、赤ダスキ、日の丸の旗が届けられました。近所の方よりお米一合づつ出し合いバラズシを造って、ささやかながらお別れの宴をしてもらいました。三月十一日の朝、近所の方達の万才の声に送られて、バスで子供二人を連れて光駅へ行きました。多勢の人波の中、赤ダスキを掛けた兵隊さんと一緒に、夫は汽車に乗り汽笛の音と共に手を振る顔が涙の曇る眼に最後の別れとなりました。子供と家に帰っても、何だか気が抜けたようになつて、大きなお腹をかかえて座りこみ何も手につきません。やつと小麦粉を水でといて、フライパンで焼いて祖父と子供との食事をしました。晩は燈火管制で電気も消えて暗い中で子供は父がいなくなつて淋しくなつたのか布団の中で泣いていました。私もなだめるのがやつとでした。毎日夜昼となく、警戒警報と空襲警報のサイレン、油断のならない重苦しい中、五月五日朝、男子を出産しました。産婆さんの声にはげまされて、弱る心を、しっかりしなければ今私がくじけては、子供達や赤子を育てる重大な責任があると思い、早く起きて世話をしなければと、ふらつく体に鞭打つて八日で起きて祖父に湯をわかつてもらつて、赤子をして洗つてやつたり、御飯の支度をしなければなりません。子供も学校に行かしたのです。七月になつて家財道具を運送屋さんに荷造りをしてもらつて、私達は祖父、子供三人、五人で現在の山県郡千代田町壬生に帰つて来しました。長い間空家にしていた為に、薬屋根が破れ雨漏りがし電気もない、川の水を飲み水にしての不自由な生活でした。八月の終戦ま

では、夫の給料が工廠より送つて来ましたが、バツタリと送金が無くなりました。その上運送屋に頼んだ家財道具が待てども届きません。十一月三十日にやつと届きました。それ迄は、私も祖父、子供も着替にも困りました。幸に実家に母がいましたので古着をもらつて来ては、縫い直してやつとしのぐことが出来ました。冬ともなれば大雪で学校へ行かすのに靴がないので、薬靴を造つてもらつて履せて行かせなければならぬ時代でした。小作に出していた田をかえしてもらい、祖父と馴れない農作業を始めました。植付準備や苗代作りと大変でした。身体中が痛くて朝は起上れない、でも働かなければ食べていけないので痛い体を引つて働きました。こんなにしても米が足りない供出には割当が来るので出さなければならぬのです。祖父も疲れが出たのか眠るように亡くなりました。海外より復員して多くの方が帰つて来られるのに、夫は帰つて来ません。晴れ着を米に替え、お金にかえて家の修理もしなければなりません。出征後十三年の月日が経つて、県庁より何の手掛りもないから戦死の公報をと話されました。三十三年四月に遺骨を受取りましたが何も入ってはいません。戦争未亡人の仲間入りをしました。娘二人共中学校しか行かせることが出来ませんでした。月日のたつのは早く今では「夫」のお陰で私もやつと生活にも困らなくなり感謝の日暮らしをしております。